

山脇巖に関する基礎研究

－バウハウス留学者の既往研究比較－

日大生産工（院） ○勝又 楨哉 日大生産工 藤谷 陽悦

1. はじめに

バウハウスは1919年にヴァルター・グロピウスによって創設された造形学校であり、その思想や教育は世界中から注目された。山脇巖、山脇道子、水谷武彦の三人はバウハウスに長期的に留学し、その詳細を日本に伝える役目を担った数少ない人物である。しかし、この三人に関する研究報告は少ない。そこで、まずは三人の既往研究についてどのような考察がなされているか調べる。既往研究については、日本建築学会、日本デザイン学会において発表されたものを対象とする。そして、既往研究の比較・考察を行い、これを今後の研究のための導入とする。

2. それぞれの既往研究について

2-1山脇巖に関する研究報告

山脇巖については、日本戦後モダニズム住宅の様相：諸井邸における細部意匠と空間構成の関係についての考¹が2002年の建築学会で、ニューヨーク万国博覧会における山脇巖の展示設計と写真壁画²が2007年の日本デザイン学会で報告されている。

前者では山脇巖による住宅作品である諸井邸を取り上げて、細部意匠と空間構成について考察し、「伝統的和風建築とモダニズム建築が合わさった時に生まれる1つの日本モダニズム建築の様相であったと考えられる」としている。そして、後者の研究では山脇巖の展示設計の特徴について言及し、その活動は「建築・ディスプレイ・グラフィックデザイン・写真といった異なる領域を一つの空間の中に結びつけようとする試み」としている。このことから巖は建築家としてではなく複合的な芸術行為を行った人物であると捉えられている。

2-2山脇道子に関する研究報告

山脇道子については、日本の近代デザインにおける女性デザイナー³に関する基礎的研究⁹が2004年に日本デザイン学会で報告されている。この論文では、山脇道子をテキスタイルデザイナーとして取り上げ、バウハウス留学期とその前後に分けて考察している。バウハウス留学期まで遡ることで道子のバックグラウンドにある茶の湯の精神について認識している。そこから、道子がバウハウスをそのまま日本に紹介したのでは無く、バウハウスの思想について茶の湯の精神から日本人独自の解釈をし、自分の作品にそれを反映させながら道子流バウハウスとして日本に伝えていったとしている。

2-3水谷武彦に関する研究報告

水谷武彦については、水谷武彦と独逸の新建築⁴と水谷武彦：バウハウス留学の再考⁵が2005年に、水谷武彦のバウハウス・デュッサウに於ける留学時代について⁶が2006年の日本建築学会においてそれぞれ報告されている。これらはルイック・ペトラが一連の研究として報告しておりその内容は、バウハウスの校長がヴァルター・グロピウスからハンネス・マイヤーに変わり、バウハウス教育の過渡期でもあった時期に水谷が実際にどのような教育を受け、誰の思想や理念に影響を受けたのかについて考察されている。結論としては、水谷はワルター・グロピウス及びハンネス・マイヤーの下で一年ずつ教育受け、アルベルスとカンディンスキーの基礎教育と、その後のモホリ＝ナギ、シュレンマーの論理的教育から多大な影響を受けたとしている。また、水谷はバウハウスを卒業せずに帰ってきたとも記述されている。

The Basic Reseach of Iwao Yamawaki

－ Comparision of Previous Reseach of Student Overseas of BAUHAUS －

Shinya KATUMATA and Youetu FUJIYA

3. 既往研究の比較

表1: 既往研究内容比較表

既往研究表題	関連者	考察対象	考察時期	発表された学会	発表年
日本戦後モダニズム住宅の様相：諸井邸における細部意匠と空間構成の関係についての考察	山脇巖 (1898-1987)	作品について	1954～1960	日本建築学会	2002
ニューヨーク万国博覧会における山脇巖の展示設計と写真壁画		作品について	1939	日本デザイン学会	2007
日本の近代デザインにおける女性デザイナーに関する基礎的研究	山脇道子 (1910-2000)	作家について	1910-2000	日本デザイン学会	2004
水谷武彦と独逸の新建築	水谷武彦 (1898-1969)	作家について	1927-1928	日本建築学会	2005
水谷武彦：バウハウス留学の再考		作家について	1927-1928	日本建築学会	2005
水谷武彦のバウハウスに於ける留学時代について：バウハウスと水谷武彦に関する研究その1		作家について	1927-1928	日本建築学会	2006

既往研究及び表1: 既往研究比較表より次のことが考察できる。

- ① 水谷武彦と山脇道子については本人に焦点を当てた研究報告がなされている。しかし、山脇巖については一つの作品自体に主眼が置かれており、山脇巖本人に焦点をあてた考察がなされていない。
- ② 水谷武彦は日本建築学会において建築家として、山脇道子は日本デザイン学会においてテキスタイルデザイナーとしてそれぞれ明確に捉えられて発表されている。山脇巖については建築学会とデザイン学会の両者に報告されており、建築家であるのか写真家であるのか、それともデザイナーであるのかについても不明瞭な状態である。
- ③ 三者の役割は別々に考察されており、三人がバウハウスの日本の受容過程においてどのような役割を果たしたのか、比較を行っている文献は少ない。それぞれの活動を比較することによって、三人がどのような方法でバウハウスの思想を伝えようとしたのか、そこからバウハウスがどのような役割を果たそうとしたのかを再考する一資料となり得る。
- ④ 三者の論考はいずれも2002年以降に発表されたもので新しい。このことから、今まではバウハウスの思想のみが注目され、日本人がそれらの思想をどのような感性で捉え、それを伝え得る役割を担ったのかについてあまり重視されて来なかったように思える。
- ⑤ 既往研究の参考文献では、建築文化、近代建築、東京美術学校校友会月報、アトリエ、建築雑誌、帝國工芸、美学研究、美術手帖、美術ジャーナル、といった雑誌が目立つ。また建築系雑誌よりも美術系雑誌が多いことから、バウハウスは建築分野よりも美術分野で注目されていたことが伺える。

4. まとめ

これまでの研究はバウハウス自体に焦点が当てられ、その理念を伝える役割を担った日本人の重要性についてはあまり注目されてこなかったように思える。近年、少しずつこれらの認識が訂正されつつある。しかし、建築と美術両分野の境界は曖昧であり、バウハウス留学者に関する研究はまだ断片的で全貌は明らかにされていないことを確認した。

「参考文献」

- 1) 伊藤亮、中川武、中沢信一郎、倉方俊輔、日本戦後モダニズム住宅の様相：諸井邸における細部意匠と空間構成の関係についての考察、日本建築学会関東支部研究報告集、2002、pp. 653-656
- 2) 山本佐恵、ニューヨーク万国博覧会における山脇巖の展示設計と写真壁画、デザイン学研究・研究発表大会梗概集、2007、pp454-45
- 3) 高橋尚子、宮崎清、日本の近代デザインにおける女性デザイナーに関する基礎的研究、デザイン学研究・研究発表大会梗概集、2004、pp178-179
- 4) ルイック・ペトラ、水谷武彦と独逸の新建築、日本建築学会大会学術講演梗概集、2005、pp223-224
- 5) ルイック・ペトラ、水谷武彦：バウハウス留学の再考、2005、pp361-364
- 6) ルイック・ペトラ、水谷武彦のバウハウスに於ける留学時代について：バウハウスと水谷武彦に関する研究その1、日本建築学会計画系論文集、2006、pp157-163